

手話で語り尽くそう

耳が不自由な人もそうでない人も、自由に語り合おうと来店を呼びかけるユニークな「手話カフェ」が、浜松市浜北区で「オープン」した。毎月第1、2、4水曜日の午前中に限られるが、必要な

のはお茶代だけ。障害のあるなしを問わず気軽にしゃべりできるうえ、手話を学ぶ人には「生きた話術」を磨く絶好の場ともなるだけに、早くも常連客が生まれつつある。(浜北通信部・河野貴子)

障害のある人も



手話カフェのオープン初日に参加した人たち。初対面でも、手話を交えて盛り上がった＝浜松市浜北区貴布祢のときわ屋で

「毛ザイカルチャーという言葉は(手話で)どう表現するの?」「ときわ屋の手話表現を、ここで考えてみようよ」。聴覚障害者から手話サークル会員、手話通訳士らまで八人の男女が楽しげに話し込む。

浜北区貴布祢の雑貨販売・ギャラリー兼喫茶店「ときわ屋」の一面でオープンした手話カフェの初回、今月一日の光景だ。

「人が集まる店にしかかった。障害者も健常者も、誰が来ても『普通ですよ』とね」。店長の岩下智子さんが話す通り、初日から障害の壁を感じさせない盛り上がりぶりとなった。

口の動きでも伝わりやすくするといった配慮から、話しながら手話をしており、最終にぎやか。ほかの人の動作をまねて自習したり、知らない手話表現を教え合ったりして、会話がとぎれる暇がない。

健常者も一緒に

浜北区に「生きた話術」広がる交流

話題も、通訳のこつや地域ごとの表現方法の違いなど、あちこちへ飛んだ。

結局、予定の二時間を四十分もオーバーしたところですよやく「もうこんな時間!」「次もまた」などと言いつつ解散となった。

聴覚障害がある浜松市東区大瀬町の主婦西村陽子さん(35)は「気軽に話ができるとてもよかったです。来週も来たい」と話した。そして「(身近に)ろう者がいることを忘れないでほしい」との願いを込めつつ、カフェの誕生を喜んだ。

障害のない人の立場でも、浜松市北区新都田の自営業佐々木雅啓さん(44)が「使えて通じる手話を覚えるのに、こういう場は大事」と歓迎していた。手話の勉強をして「普段の生活では使わない人がほとんど」というのが実態だそう。

カフェは原則として午前十時から正午まで。問い合わせはときわ屋

電話・ファクス053(587)7006

県内に

バスケット死亡事故

静岡市駿河区の県営草薙総合運動場体育館で、会社員藤井智章さん(32)＝同市清水区＝が電動折り畳み式バスケットボールゴールの支柱に首を挟まれて死亡した事故で、同様の移动式ゴールが県内でほかに少なくとも二十四基あることが二日、県の調査で分かった。このうち十七基は異常がないと確認された。残る七基は草薙総合運動場体育館にあるため、県警の現場検証が終了次第、確認する。県はこの日、県内の全三十七市町や各教育委員会に対し、移动式ゴールの有無の確認と安全点検を指示。県や市町が管理する公園、体育館の調査結果を速報としてまとめた。幼稚園、公立、私立の学校施設などについては集計を進めている。県公園緑地室によると二十四基は、草薙総合